

鉄道兵

小さな初年兵の戦い

東京都 小船井 貞三

私は、昭和十九（一九四四）年四月三十日、世田谷野戦重砲第八連隊へ補充兵として臨時召集で応召、数日後、品川から博多、朝鮮を経て満州・牡丹江の鉄道第四連隊に配属され、そこで一期の検閲を終了した。

その後、遼陽補第八百九十一部隊が編成され、鉄道兵要員として、そこに配属となり、十日門司港から「大博丸」でフィリピンに向かった。途中、敵潜水艦の魚雷を受け、バシー海峡沖で十時間余り漂ったが、幸いにも駆逐艦に救助され、十一月一日にマニラに上陸した。そこは既に戦場で一日中空爆に次ぐ空爆だった。数日後、仏印から転進して来た本隊と合流し、鉄道第八連隊が編成

された。私は第一中隊に配属となりタルラック駅機関区分隊輸送班の任務に就いた。

昭和二十年一月四日付の輸送命令でタルラックからサンホセに向け発車した。中間地点まで順調に運行していったが、突然、激震に襲われ、機関車が脱線転覆し、私は右に投げ出され道床下に転がっていった。同僚の助手は左へ投げ出され、テングダー（炭水車）の角で頭を打ち瀕死の状態だった。ゲリラがレールの枕釘が数十本を抜き取り線路妨害したのだ。幸い他の列車に異常がなかったことが唯一の慰めであったが、戦友の無惨な姿を見て大きな衝撃を受け、戦争の無惨さを初めて身をもって味わった。救援車が到着するまでの間を利用し、遺体を掘り出し、枕木を拾い集め茶毘に付した。空高く昇る煙を皆と眺め、全員で合掌し冥福を祈った。

やがて救援車が到着、線路の応急処理が終わった。救援車両の連結も完了したのは発車間際だった。

た。突然、敵の空襲、ロッキード機の黒い機体が急降下してきて、車中の兵は一斉に車両の下に逃げ込んだ。敵機は車両を的に反復攻撃を繰り返して機銃掃射をする。列車は忽ち天井も床も貫かれ、車両の下に逃げ伏せた兵は全滅したかと思われた。

人の運命とは奇妙なもの、私が車両から飛び降りた瞬間、背中を鈍器で殴られたような衝撃を受け、道床下へ転げ落ちた。そこには葉の繁った立木があり、それに寄り掛かった。血の滴る自分の姿を見て急に痛みが走り、失心して倒れた。気付いた時は天幕張りのサンホセ野戦診療所の病床だった。

ここでも、運命の不思議さを味わった。水筒を枕に伏せていたところへ機銃掃射の嵐だ。枕にしていた水筒を掠めて隣に寝ていた傷病兵の頭を貫いていた。担架で運ばれた後にまっ赤に染まった毛布を見て啞然とするばかりである。硝煙の臭いがいつまでも漂っていたのを今も思い出す。運命

のいたずらを、これほどまで現実に見たことは後にも先にもなかった。

昭和二十年一月九日、敵はリングエン湾上陸、制空権は完全に敵の手中にあった。それに呼応してゲリラも蜂起し、線路は寸断、橋梁は爆破され、鉄道運行は完全に不能となった。

連隊長は「謹んで鉄道を放棄する」と司令部へ打電し、中隊にサンホセに集結を命じた。私も体の痛さを耐えて中隊に復帰した。

三月、首都マニラは陥落、中隊は鉄兵団に配属され、ルソン島の中核の要地、バレット峠に布陣した。

蝸壺では銃弾は避けられても空からの爆撃には一瞬にして多数の兵が飛ばされ斃れていった。敵は歩兵の夜間攻撃はしない。その間を利用し、攻撃のためではなく、食料を集めるための決死の活動を行った。五人で一組の隊を編成し、敵キャンプへ斬り込みを掛けるのである。時には奪った食

糧を握ったまま死んでいった兵も多かったです。

壕では病と飢えを苦に「カカアと子供のために死んでも死にきれぬ」と一言叫び、水面に顔を伏せ、そのまま死体となっていった予備役の下士官もいた。

敵の攻撃はますます激しくなってきた。敵の晩の攻撃を恐れ、毎夜陣地を変え、二、三キロ陣地を移動する。その度に躓く亡骸に「ハッ」と目を覚まし、我に返り、暗がりを幽鬼のようにさまよって歩く。このような夜の逃避が毎晩、続くようになった。

敵は、いよいよ迫ってくる。病で動けぬ将校は「生きて虜囚の辱しめを受けず」と戦陣訓の通り自刃し果てた者もいる。また昼の絶え間ない銃砲火の重圧に耐えかねて「男の純情」を歌いながら壕から飛び出して即死した山田という医大卒の同年兵の死もまた哀れであった。

敵機動力は、ブルトナーザーで立木を薙ぎ倒し、

後は火焰放射器で焼き払い、山は丸裸、道なき道を戦車で切り拓き、傍若無人に敗残兵を追跡し探し求める。

連戦苦闘、四カ月間耐え忍んだが、バレット峠の牙城も遂に陥ち、各部隊は壊滅状況になり完全撤退した。我が中隊も、連隊長は戦死、最後の砦も放棄し、奥地山岳地帯へ転進したと聞いたのは、密林の窪地の野戦治療所だった。それは中隊がまだ防禦陣地を撤去する数日前のことだった。

私は兵団の切り込み隊に加わり、逃げる折に手榴弾の破片を背に受けて負傷し赤チンと消毒液だけの麻酔薬抜きで摘出手術を受け、仮包帯で体をぐるぐる巻いた。

数日でここも撤去するということで、追い出されるように退院する折、中年の一人の軍医から教えられた。その時にはこう語ってくれた。「戦争でも、死ぬことだけは絶対に急いでは駄目だ、命は粗末にするなよ」と。情を込めて、今一度怒鳴られた。「ハイ！」声を出して泣きたい思いだつ

た。「どんなことがあつても耐えていこう。生きぬいていこう」と決意し、行方の知れぬ中隊、友軍を求めて敵から遠ざかる方向を選び、同僚三人と共に、部隊のない遊兵となり、敵に発見されることを恐れての彷徨が始まつた。

ゲリラの狙撃を警戒、昼間は木陰、草むらに声の届く範囲に分散し、道路から十数メートル離れて這うように昼夜を分かつた。ある時は敗残兵討伐に火焰放射器を噴火しながら通過して行つた戦車にも出会つた。

常に手榴弾の着脱に細心の注意を払い、ゲリラと遭遇した時は相手を殺さねばならない。相手を殺さなくては己が殺される。戦争中は一過性の狂人にならなければならぬ。飢えと疲労の限界に達した数日後の夕刻、漸く友軍に出会うことができた。竹林を背に腰を下ろし、やれやれと思つたところ、この駐屯兵も敗走転進中らしく、目の前に拡がる川向こうの山岳地帯への移動の準備中で、慌しく動いていた。三人は合流を諦め直ちに

渡河を決めた。

衣類、飯盒、水筒を雑囊に詰め込み浮き袋の代わりにし、二メートルほどの竹棒の一本を三人で交互に握り浅瀬を探つて慎重に丸裸で渡つた。

渡河し終わった時、友軍小隊が竹筏に乗り河を渡り始めた。突如、敵偵察機が照明灯を照らして飛来して来た。薄暮の空が明るくなり、一瞬後、ヒルヒルと空気を裂く砲弾の飛来音と同時に筏上でも炸裂、砲煙と夜空を照明が吹き飛んだ兵を映し出した。そこに凄惨たる光景が現出していた。

三人は木に寄り掛かり目を合わせた。一言もなく啞然として照明下の惨事を見つめるだけだつた。敵機も去り、後は暗闇の中で、そのまま眠りこけた。目が覚めた時、昨夜のことが悪夢のように浮かび、四周の状況に目を向けた。川岸には様々な物が散乱していたが兵の姿は見えなかつた。

心に深いしこりを残して、今日も遊兵の命を掛けた友軍探し。今度は山中ジャングルの中の獣道

を伝って進んだ。一粒の乾パンを口に、昼は熱気、夜は冷気に耐えながらすすきの根を嚙り、溪谷で沢カニを捕り、射殺した水牛の血を啜り、乾き切った腐肉をしゃぶり飢えを凌ぎながら数日、山中を彷徨し、やっと友軍に出会った。隊名を問いただし、い質さぬまま合流した。

流れる川の水を煮詰め、一日掛かりで一掴みの岩塩を採取したこともあった。その後、幾度も部隊を変えた。その頃の軍隊組織は完全に崩壊し、烏合の衆と化していた。

次の寄せ合い部隊と合流する際には、米と塩の争いで二人は命を失う羽目になり、一人は射たれて腹を押さえて斃れ、一人は行方不明となった。私一人だけがその部隊に世話になることとなり、三人の遊兵の最後は哀れな結末を迎えた。

それから数日後、無線の傍受で日本軍の全面降伏を知った。

米軍との戦いは終わったという安堵感と、無条

件降伏という虚脱感で、張り詰めていた糸がぶつかり切れた。今まで、戦ってきたことは何であったのかと、暫くぼんやりした日が続き、空しい思いに取りつかれ、一時は歩行するのさえ困難になった。

数日後、ようやく米軍の指定した収容所へ白旗を掲げて向かった。収容所のポンドマックで両手を挙げて降伏する姿を想像すると複雑な思いが一瞬身内を駆け巡った。

今までの戦場を辿りながらいくと、途中は夥しい死体の山。「こんなにも多くの兵が亡くなったのか」暫く絶句のほかに声が出ない。腹に蛆ウジいっぱいに湧いているむくんだ新しい死体、骨だけが横たわっている屍がある。中にはみみずが蝕まれた屍骸も見受けられる。それらの屍を横目に、死臭漂う山道を数十日かけて歩んだ。道を歩みながら、乾期の近い雨上がりの木枝から落ちる山蛭ヒルにも注意を払い、十数人の疲れ切った兵が、激戦で山形の変わった道をとぼとぼと進んで行く。途

中、展望の開けた山頂で銃の紋章を削り、最後に実弾一発を大空に向け撃つ。続けて手榴弾を爆破し、思わず手を合わせる。誰言うもなく黙禱し山を下った。

高い鉄条網に囲まれた収容所が見えてきた。衛兵がガムを噛みながら一兵一兵を鋭く観察する前を、銃殺覚悟で通り過ぎた。米国旗の下に横一列になり、次々に武装を解かれ無防備になった。奪われた銃剣が投げられてガチャガチャ積み重ねられる音を空しく聞きながら相手のなすままの虜囚の一日が始まった。

頭上の星条旗が凜然とはためき、茜の夕空に映えていた、その風景で「俺の命は救われた。戦争は終わった。国は敗れ捕虜となった」等々で千々に心が乱れた。優越感を無くし、失意の足取りで、監視兵の誘導のまま、収容所で生活する抑留の毎日が始まった。

日本の軍隊は命令のまま、死地に向かうべく訓

練され、上官の命令を至上とし、また負傷しても、食糧がなくても、餓死寸前でも、誰一人として降伏することを考えなかった。ひたすら戦い、斬り込みに志願、また発狂人も自殺者も出た。

戦争は悲惨である。とくに弱者にとつて。この平和な時代が永遠に続くよう祈って話を終わります。

中支と大島防衛 再度のご奉公

神奈川県 安藤 要

私は、大正八（一九一九）年、厚木市戸室に生まれ、昭和十四（一九三九）年十二月、甲府第四一九連隊第九中隊入隊しました。直ちに同年十二月二十三日、北支派遣により二十九日塘沽港上陸、河南省陽武にて初年兵教育を受けました。以降、冀南討伐作戦等に参加しました。